

『外部対応』

1 1 社会との連携

基準 11-1

医療機関・薬局等との連携の下、医療及び薬学の発展に貢献するよう努めていること。

【観点 11-1-1】 地域の薬剤師会、病院薬剤師会、医師会などの関係団体及び行政機関との連携を図り、医療や薬剤師等に関する課題を明確にし、薬学教育の発展に向けた提言・行動に努めていること。

【観点 11-1-2】 医療界や産業界との共同研究の推進に努めていること。

【観点 11-1-3】 医療情報ネットワークへ積極的に参加し、協力していることが望ましい。

[現状]

本学のミッションに連動して、北海道薬剤師会や北海道病院薬剤師会、地方自治体などの関連する審議会や委員会、薬学的知識や技術の提供に繋がる講演会などに薬学部教員は積極的に関わっている。平成 20 年度における地方自治体への委嘱委員の派遣としては、当別町教育委員会・当別町生涯学習推進計画策定委員会(教授 1 名)、北海道環境生活部・北海道 PCB 廃棄物処理計画委員会(教授 1 名)、北海道総務部・北海道政策評価委員会(教授 1 名)などが挙げられる。また、関連団体が主催・共催する講演会やセミナーへの講師の派遣も毎年多く、平成 20 年度は 40 件(教授 20 件、准教授 14 件、講師 6 件)を数えた。

また、1 年生の早期体験学習では、受入保険薬局のリストアップを北海道薬剤師会に依頼している。また保険薬局を開設している卒業生に保険薬局アドバイザー(5 名)を委嘱し、早期体験学習や実務実習に対し、様々なアドバイスを受ける体制を構築している。

さらに本学では、北海道内の病院・保険薬局に生じた様々な問題に対し「薬・薬学連携」により迅速に問題解決を図り、また同時に、臨床能力の高い薬剤師の育成と薬学教育の充実に向けた取り組みを相互に促進することを目的として、2007 年度に薬学部内に「薬剤師支援センター」を開設した。現在、薬剤師支援センター長は実務家教員(実務薬学教育研究講座教授)が担当し、実務実習について様々な意見交換を重ねるとともに、医療現場との共同研究を展開している。

また、薬学研究科では医療薬学専攻修士課程で約 6 ヶ月にわたる臨地実習を実施してきたが、この臨地実習における学生の課題研究を、共同研究として関連学会に発表し、また学術論文として公表してきた。さらに製薬企業との共同研究も積極的に行われ、その中には研究成果が特許出願に至ったも例も見られている。平成 18 年度に「職務発明規定」が制定され、特許の公開などを通じた学術研究成果の社会的活用が全学的に推進されている。

[点検・評価]

・薬剤師職能団体との連携は順調に行われていると評価される。しかしながらそ

の一方で、医師会や歯科医師会など他の医療職との交流が必ずしも十分でない。医療及び薬学の発展には、他の医療職との連携は必要不可欠であることから、今後その取り組みを促進していくことが重要である。

[改善計画]

現時点では早急に改善すべき問題点は見出されていないが、今後、関係団体との連携をさらに深めながら、薬剤師の地位向上に取り組んでいく。

基準 11-2

薬剤師の卒後研修や生涯教育などの資質向上のための取組に努めていること。

【観点 11-2-1】地域の薬剤師会、病院薬剤師会などの関係団体との連携・協力を図り、薬剤師の資質向上を図るための教育プログラムの開発・提供及び実施のための環境整備に努めていること。

[現状]

薬学部では開設以来、公開講座や特別講演会、医療薬学セミナーなどを北海道薬剤師会・北海道病院薬剤師会などの職能団体並びに本学薬学部同窓会と共同で開催し、本学卒業生のみならず医療現場の薬剤師に広く生涯研修の機会を提供してきた。平成 12 年 4 月、本学に NICE (National and International Collaboration and Extension Center) センターが開設されたのを機に、現在では歯学部、看護福祉学部、心理科学部との連携を深めながら全学的な対応の中で薬剤師の卒後研修や生涯教育に取り組んでいる。薬学部では薬学部 NICE 委員会が中心となり、多彩な生涯学習講座を企画・運営している。

過去 5 年におけるその実施状況を以下に示す。

講座名	開講数(延受講者数)				
	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
医療薬学公開講座	1 (77)	1 (190)	—	—	—
医療薬学セミナー (薬学部同窓会共催)	9 (253)	12 (393)	10 (221)	11 (230)	7 (229)
薬剤師リフレッシュスクール	4 (149)	4 (109)	4 (161)	4 (85)	—
専門薬剤師養成基礎講座 (感染制御専門薬剤師コース)	—	—	6 (162)	6 (202)	6 (147)
専門薬剤師養成基礎講座 (がん専門薬剤師コース)	—	—	6 (181)	6 (535)	6 (331)

専門薬剤師養成基礎講座(がん専門薬剤師コース)は2008年度より文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」として実施中

これらは財団法人日本薬剤師研修センター認定の研修単位(1単位)の交付対象として実施されている。ホームページやパンフレットを通して広く各方面に周知するとともに、北海道薬剤師会及び北海道病院薬剤師会にも協力を仰ぎながら参加者の募集を行っていることもあり、多くの受講者を得ている。また、「医療薬学公開講座」、「薬剤師リフレッシュセミナー」、「専門薬剤師養成基礎講座」は参加者の利便性を考慮し専ら本学札幌サテライトキャンパスで実施されるが、薬学部同窓会と共催で実施される「医療薬学セミナー」は、毎年各地区の同窓会支部の要望を基に薬学部教員が講師として派遣され、沖縄を始めとして全国で開催されている。

現在本学では、文部科学省の財政支援の下に 12 のプロジェクトが進められている。薬学部ではこのうち「がんプロフェッショナル養成プラン」と「社会人の学び直しニーズ対応教育プログラム」において生涯教育に取り組んでいる。平成 19 年度に選定さ

れた文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」においては、札幌医科大学、北海道大学、旭川医科大学と共同で「北海道の総合力を生かすがんプロ養成プログラムー大学、地域、病院の連携を生かしたがん専門医療人の育成ー」を推進している。この事業の中では、看護福祉学部と連携を取りながら、がん医療に高度専門性を持つコメディカルの養成に取り組み「がん専門薬剤師養成基礎講座」を実施している。

平成 20 年度に選定された「社会人の学び直しニーズ対応教育プログラム」では、「地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム」が実施されている。これは、地域の薬剤師が最新の情報を入手・提供できる能力の育成を目的としており、座学による講義に加えて、受講者 1 人 1 人がノートパソコンを使いながらインターネットで情報を検索する演習なども盛り込まれている。

[点検・評価]

- ・薬剤師の卒後研修及び生涯学習に対し、適切なプログラムの提供が行われていると判断される。これを反映するように、各回終了後に受講者にアンケート用紙を配布し感想や意見を収集しているが、すべての講座について内容に関する評価は良好である。
- ・地域の薬剤師会、病院薬剤師会などの関係団体との連携・協力体制も十分に機能している。
- ・薬剤師の卒後教育や生涯研修に関しては、薬剤会や病院薬剤会にも担当委員会が設置され様々な取り組み(講演会やセミナー)がなされている。したがって、開講する講座の内容が重複することもしばしば見られる。職能団体との情報交換を密にして、参加者に満足度の高い企画を計画していく必要がある。

[改善計画]

現時点では、薬剤師の生涯学習に向けた取り組みに改善すべき点は見当たらない。しかしながら、医療の高度化や薬物療法の急速な進歩に伴い医療現場で薬剤師が対処しなければならない業務は拡大の一途を辿っている。そのような状況の中で薬剤師には高度の専門性を発揮しながら医薬品の有効性と安全性の確保に貢献していくことが一層求められている。そこで、これまで培ってきた生涯教育の実績を基に新たに「北海道医療大学認定薬剤師研修制度」を立ち上げ、自己研鑽を志す薬剤師を対象として内容の充実した薬剤師研修講座を開講することをめざしていく。

基準 11-3

地域社会の保健衛生の保持・向上を目指し、地域社会との交流を活発に行う体制の整備に努めていること。

【観点 11-3-1】 地域住民に対する公開講座を定期的を開催するよう努めていること。

【観点 11-3-2】 地域における保健衛生の保持・向上につながる支援活動などを積極的に進めていることが望ましい。

【観点 11-3-3】 災害時における支援活動体制が整備されていることが望ましい。

[現状]

NICE センターが中心となり、本学の持つ諸機能と知的財産を広く社会に還元し社会に開かれた大学として地域貢献を果たすことを目指して様々な一般向け生涯学習事業が企画・運営されてきた。薬学部も全学 NICE 委員会と薬学部 NICE 委員会を通して積極的に生涯学習事業に参画している。平成 20 年度には「国際健康フォーラム」、「北海道医療大学セミナー」、「エルダースクール」、「地域連携セミナー」、「大学開放講座」など 43 の講座が開講された。これらの講座は、本学キャンパスあるいは札幌駅前にあるサテライトキャンパスで開催され、延べ受講者は 2,047 人に達した。

本学キャンパスがある当別町とは住民の保健衛生の保持・向上に向けて年々連携を深め、「当別学講座」を年 6 回共同開催している。平成 21 年度には「やさしい薬のはなし」、「もっと知りたい、食品の安全について!」、「魅惑的な生薬“紫根(シコン)”」と題して薬学部教員が講師を担当し、薬の安全使用などに関する啓発に努めた。当別町以外に江別市とも地域連携セミナー「からだと心」を共催しているが、これにも企画に応じて薬学部教員が講師として参画している。平成 20 年度には「安全な食品を見分けるための新常識」と題した講演が行われた。

また毎年大学祭の時期に薬学部教員が中心となって「薬草園を見る会」を企画・運営しているが、これにも当別町民を始めとして近隣市町村から定員を大きく超える参加者が訪れ、大好評を得ている。その他にも「漢方・薬用植物研究会」や「色と香りで楽しむ染料・薬用植物染講座」など、薬学部の特徴を生かした企画が開催されている。

[点検・評価]

- ・ NICE センターが生涯学習事業の企画や開催に中心的役割を果たすことで、各教員に過重の負担が掛かることなく、地域住民との交流が良好に推進されていると評価される。
- ・ 災害時における支援活動体制は未だ整備されていないが、現在、薬学部専任教員の中に医師免許を有するものが 3 名いる。また臨床経験を有する実務家教員が 6 名と配置されており、これらの教員を中心に支援体制を組むことは可能であると判断される。

[改善計画]

地域との交流は NICE センター事業を通して大きな成果を挙げており、現時点では大きな修正点はない。今後も引き続き地域連携セミナーや大学開放講座を通して、地域住民の保健・福祉の保持・向上に寄与していく。

基準 11-4

国際社会における保健衛生の保持・向上の重要性を視野に入れた国際交流に努めていること。

【観点 11-4-1】 英文によるホームページなどを開設し、世界への情報の発信と収集が積極的に行われるよう努めていること。

【観点 11-4-2】 大学間協定などの措置を積極的に講じ、国際交流の活性化のための活動が行われていることが望ましい。

【観点 11-4-3】 留学生の受入や教職員・学生の海外研修等を行う体制が整備されていることが望ましい。

[現状]

平成 16 年に本学情報センターにホームページ委員会が設置されて以来、全学的にホームページの充実が図られ、国内外への情報発信が従前にもまして積極的に進められている。英文ホームページも開設されており、そこには大学紹介、学部概要、キャンパス情報などが紹介されている。

現在、本学の国際交流は北海道医療大学 NICE センターが窓口となって実施され、NICE 委員会が国際交流事業の企画・立案を行っている。平成 21 年度において海外の大学との学術交流は、大学間提携としてアルバータ大学(カナダ・エドモントン市)、甲南大学(中国・長沙市)、台北医科大学(台湾・台北市)、モナッシュ大学(オーストラリア・メルボルン市)の 4 大学と、学部間提携として同済大学(中国・上海市)、青島大学(中国・青島市)、ニューヨーク州立大学バッファロー校(アメリカ・バッファロー市)、インドネシア大学(インドネシア、ジャカルタ市)の 4 大学との間で進められている。薬学部は、1991 年以來アルバータ大学と相互に教員派遣を行い、共同研究打ち合わせや特別講演会などを通して交流関係を築いてきた。また青島大学とは 2000 年度から学部間提携を開始し、定期的に短期委託大学院生の受入を行っている。期間は約 1 年間で、2008 年度には医学研究科学生 1 名を分子生命科学講座(生化学)が受け入れた。

外国人留学生にも積極的に門戸を開いており、2009 年度においては、博士後期課程に在籍していたブラジルからの留学生 1 名が学位を取得している。また最近、JICA が募集する日系研修員制度を利用した日系人の受入も活発に行っている。南米諸国の薬学部を卒業した日系人薬剤師が、薬学の高度専門知識や日本における医療を学ぶために、本学での研修を希望してくる。現状では、2~3 名程度の受入を可能として、毎年 JICA との調整を行っている。2009 年度には、薬剤学講座がブラジルとアルゼンチンからの日系研修員 2 名を受け入れている。

本学では、学問専攻分野に関する視察や国際学会への参加を理事長名または学長名で海外に派遣する「海外派遣出張」制度を整備している。2008 年度は全学で 46 名がこの制度を利用したが、薬学部では 11 名の教員(教授 4 名、準教授 3 名、講師 2 名、助教 2 名)が国際学会や国際シンポジウムに参加し研究成果を発表した。また、年 1 回春期または夏期休暇期間を利用してアルバータ大学またはモナッシュ大学で約 20 日間の語学研修が行われている。2008 年度はモナッシュ大学で実施され、

全学で 36 名、薬学部から 6 名の学生が参加した。2009 年度はアルバータ大学へも語学研修が企画されたが、新型インフルエンザの影響により中止された。

教員の海外研修も積極的に行われている。2008 年度には 3 名の教員が 3～10 ヶ月間留学する機会を得た。また、2010 年度にも講師 1 名の海外研修が予定されている。

[点検・評価]

- ・英文ホームページは開設されているものの、学部紹介に関する内容が十分でないために、国外への情報発信が限定的である。今後、留学生や研修生を積極的に受け入れて国際交流を活発化させていくためにも、英文ホームページの内容を充実させていくことが必須である。
- ・海外の大学との交流はこれまで積極的に推進されてきたと評価できる。しかしながら、提携大学との教員の相互往来が 6 年制教育の影響もあり、ここ数年中断したままになっている。若手教員が交代で定期的に提携大学を訪れ、国際社会における薬剤師教育の現状を学ぶ機会を拡げていくことが必要である。

[改善計画]

英文ホームページの内容の充実を図る。6 年制完成時までは国際交流に専任教員を大幅に導入することは難しい状況にあるが、提携大学との関係を維持するためにも、教員の短期訪問を支援していく。